



月刊 千葉労働

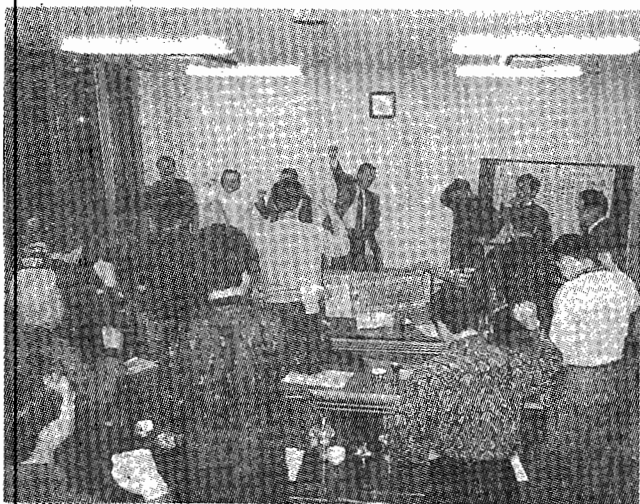
国鉄千葉動力車労働組合

〒260 千葉市中央区要町2番8号(動力車会館)
電話 { (鉄電) 千葉 2935・2936 番
(公) 043 (222) 7207 番

92.12.4 No. 3702

木更津支部第15回定期大会(11月28日開催)

次代を展望する小島体制究明



闘いの継承・発展へ!

木更津支部第一五回定期大会は、一月二八日君津教育会館において本部より中野委員長・田中書記長・山口執行委員の出席をえるなか開催され、PKO連続闘争―新たな反戦闘争の創造の一翼を担い、動乗勤改善阻止闘争―「九二・三ダイ改」阻止闘争―一〇・二三営業における原職奪還ストの成果を確認し、次期闘争への意思統一の場として大成功を勝ちとった。

大会は、議長に小柴将美君を選出したあと、冒頭あいさつに立った斎藤支部長は、「この一年間は「分割・民営化」体制の全面的破綻が目に見える形で現出した。端的に言えば清算事業団の累積債務は増大し、「バブル経済」に依拠していたがゆえに、その崩壊によって「解決」の糸口を失い、何のための「分・民」であったのが白日の下に晒され、もう一方で「JR体制」が危機なるがゆえに、「労務政策の変更」により次々とJR総連の切り捨てという形で推移した。現在JR当局は、「JR東日本鉄道部門五万人体制」合理化の攻撃を強めている。われわれは原点に立ち返り、反合・運転保安闘争―闘う動労の伝統を真に継承する闘いに職場生産点から総力を上げて決起しよう―これがあらゆる攻撃を粉砕する道だ!」と力強い提起が行われた。

社支葉千
一 体
ど う
な っ て
し ま っ た か ! ?
の

助役も

わからない

揭示一枚で

ダイ改実施!?

千葉支社は、組合からの強い要求によって、今ダイ改より開業になった「空港第二駅ビル駅」に、通過防止対策としてATS-IP地上子を設置した。ところが、当該の千葉運転区、銚子運転区では、ダイ改直前の十一月二五日になって始めて揭示一枚を貼りただけで、運転士に対しては、何の指導も訓練も行なわれなかった。その揭示の内容も、何処に地上子があるのか、どのような性格の地上子なのか、全く不明確なものであったため、しかたなく運転士が助役等に質問すると「解らない」と言っただけでそれっきりというありさまであった。本来ならば指導訓練等で徹底をはからなければならぬ性格のものである。ところが、毎月の訓練は「競技会」等労働者をお互いに競い合わせたり、ゴマすりばかりにうつつをぬかしているために、列車を動かすにあたって何が必要なのかという業務の基本中の基本がスッポリ抜け落ちてしまっているのである。

列車混乱を
そつちのけで

「競技会」

ところで、「競技会」と言えば、十一月二五日、濃霧と信号機故障で、終日列車が混乱している最中、何と、木更津駅において、分割・併合の「競技会」を実施したと言うのだ。常識では考えられないことだ。そもそも、早朝の濃霧・信号機故障で夜まで列車が乱れ続けること自身、千葉支社が列車整理する能力を失ってしまったことを示すものだが、列車混乱などそつちのけで、社員がストップウォチ片手に「競技会」で駅を走り回っているような鉄道会社とは一体何なのか!当局は、「一旦計画したものは列車が乱れようとあくまでも実施する」というのである。「今日は中止しよう」と言い出せる者ひとりいないのだ。支社運輸部がこんな姿勢であれば、「出発赤でも行け」と言い出す指令が次々と出てくるの当然のことだ。全てが本末転倒してしまっている。

「これでは事故が起こらない方がおかしい!」――これが現場の声である。

自覚し機能する組織を

続いて来賓として社会党木更津支部高野委員長、本部田中書記長よりあいさつを受けたあと、一般経過報告・会計報告・会計監査報告・運動方針(案)・予算(案)の提起を執行部より受け質疑応答に入った。

①、六〇才定年まで働ける労働条件確立の運動を強化すべきだ！

②、要員が逼迫している中で、運転・検修競技会などが多く(内容もひどいが)年休よりも優先している状況がある。又、ダイヤ混乱時にホームで連結作業の競技会を行うなど問題がありすぎる。是正を強く求めるべきだ！

③、運転士登用差別地労委に当事者の予科生として主体的に参加してきた。展望はどうか？

④、営業に強制配転された組合員の原職奪還の闘いを、運転からも心ひとつに作ってほしい。

等々が三〇名を越える組合員から、熱気溢れる討論として出され、闘いへの意思結集がなされたのである。

新役員体制

支部長	小島鎮雄	執行委員	鈴木敏夫
副支部長	山中茂男	特別執行委員	斎藤 勇
書記長	小柴光一	特別執行委員	渡辺直和
執行委員	白石正隆	特別執行委員	朝生富夫
執行委員	高橋正男	会計監査委員	高橋長治
執行委員	嶋田喜彦	会計監査委員	斎藤英明

最後に、斎藤前支部長からバトンを受けた小島新支部長が、「原則を基にしつつ、運動のあり方を全体で摸索しながら、一人一人が自覚し、全員が役員として機能する組織を創ってきたい」という所信が明らかになった。ここに木更津支部の次代を展望する闘う体制が発足したことが確認されたのだ。

全解雇者の原職奪還へ！清算事業団闘争勝利！反合・運転保安確立へ向けた勝利への団結カンパローがいつまでも鳴り響いていた。

役員を代表して挨拶する斎藤前支部長
「この一〇年間の長期にわたる闘いの中で思いたされるのは、まず第一に労働本部からの分離・独立の闘いであり、「分割・異質化」阻止の二波の闘いであった。支部として飛躍のポイントとなった、「合連マル生」阻止のストはとりわけ印象に残っている。今回小島新支部長に多スキを渡し、木更津支部の将来を共に築いていくための厚力として、今後も尽力していく覚意である」



この団結の力で

